

倚疊有焉鹿鹿攸縛鹿鹿跼々不狩不獵瞻有懸特如狼刺以庖刀蓋所以爲惡獸丁々鼓刀屠之手之所觸足之所履善然騁然因便施巧無不閑解行人止而觀焉聞天武帝四年令天下始禁獸食自非餌病不許輒噉世因謂曰藥食前日江都中稱藥食舖者纔一所麴街某店是而已計二十年來此藥之行此店今至不可復算數招牌例畫落楓紅葉題以山鯨二字雖係藥食猶避國禁作意所爲蓋隱語耳都人字曰魁魅亦不顯言之故已非謂妖怪也前日麴街所鬻之肉包苴必用敗傘紙今皆籜焉則都下一歲幾萬敗傘不復給於用也

〔鹽尻五〕信州諏訪の祠官鹿食無穢の章を出し妄りに火を穢す恐くは佛家の意より出たり今其札を見れば神代の故にあらず業盡有情雖放無生身同證佛果と云たり是全く佛者方便の説なり

〔安齋隨筆 前編七〕一吾國忌肉食 源元珍柏崎永以日本風土輯説云徳川神君駿府御隱居ノ日彼地淺間神主總社宮内某に問て宣ハク當社ノ産子として産土神ノ甚嫌はせらる、神誠とて決して獸肉を食する事を忌尤山一ツあなたの信濃の諏訪ノ社にては彼神の許可として産子平常に獸を食し剩其社の祭禮には七十二ノ鹿ノ頭を備へ祭ると云此各別の様子は如何宮内答テ申サク上古ハ諸國專ラ獸を食したる事既日本書紀に舉し如し然るに凡長門國萩のあたりより陸奥津輕の地に至て此日本の正中を山一筋に續て南北を隔たり是故に其山の東南の諸國は甚温暖の國也又其山の西北の諸國は甚寒冷の國也されば東南の方は人民漫に獸肉を食すれば蒸熱して惡病を煩ふ事古今眼前に顯然たり是はこれ公義の制禁として下知せられんに東南の地は肉食には不合ものゆへ食すれば惡病を受く日本は小國なればひたすらに獸を殺せば其類盡て民用を闕く必ず食する事勿れと嚴密の公命出たりとも一文不通の土民其口の爲に其身を抛て中々其禁制を守る事あるまじく候然るに其産土神の嫌ひ忌みたまふと云へば